吉野 中(なか) 荘(しょう)

いにしえの人が愛した万葉の郷

柴橋の峡谷(ビューポイントA)

この夕　柘のさ枝の流れ来ば
　　梁は打たずて取らずかもあらむ
　　(『万葉集』巻三－三八六)

夢のわだ(ビューポイントB)

わが行きは久にはあらじ　夢のわだ
　　瀬にはならずて淵にあらぬかも
　　(大伴旅人『万葉集』巻三－三三五)

題字：森嶋　隆鳳

まちづくりマップ

年　表

時　代	黒字は中荘でのできごと、赤字は日本全体でのできごと
縄文時代早期	宮滝や川上村迫などで人々が暮らし始める
縄文時代後期	宮滝式土器が近畿地方を中心に使われ始める
弥生時代中期	宮滝で竪穴式住居や方形周溝墓が作られる
5世紀中頃	雄略天皇が吉野宮を訪れて狩りを行ったという
645年	大化の改新
656年	斉明天皇が吉野宮をつくる
659年	斉明天皇が吉野宮を訪れる
671年	大海人皇子が吉野入りする
672年	大海人皇子が挙兵し、壬申の乱が始まる
673年	大海人皇子、飛鳥浄御原宮で即位。天武天皇となる
679年	天武天皇が皇子たちの結束を吉野宮で誓約させる
689年	持統天皇が吉野宮を訪れる。以後30回以上訪れた
8世紀前半	吉野離宮が造営される
700年ごろ	文武天皇や元正天皇が吉野離宮を訪れる
724年	聖武天皇が吉野離宮を訪れる
751年	『懐風藻』や『万葉集』に吉野を歌う歌が収められる
898年	宇多上皇が菅原道真らと宮滝・龍門寺などを訪れる
1185年	源義経が兄の頼朝におわれて、吉野山へ逃げる
1336年	後醍醐天皇が吉野で南朝を開き、南北朝が始まる
1339年	後醍醐天皇が吉野で亡くなる
1381年	『新葉和歌集』に南朝方の和歌が収録される
1684年	松尾芭蕉が吉野を訪れ、後に『野ざらし紀行』を記す
1778年	上田秋成が吉野を訪れ、宮滝に吉野宮があったと主張する
1890年	水本安吉が柴橋上流の岩礁を掘削し、吉野川の改修に寄与する
1923年頃	澤瀉久孝、宮滝を訪れる
1927年	中岡清一、森口奈良吉らによる吉野宮跡所在地論争が起こる
1930年	宮滝遺跡の発掘調査が始まる 谷崎潤一郎が宮滝・菜摘を訪れ、翌年『吉野葛』を発表
1956年	上市町・吉野町・中荘村・国栖村・中竜門村・龍門村の六か町村の合併が調印され、現在の吉野町が発足する
1957年	宮滝遺跡のうち22,625㎡が、国史跡に指定される
1972年	三笠宮ご夫妻、宮滝遺跡を来訪される
1975年	橿原考古学研究所による宮滝遺跡第2次発掘調査実施
1983年	吉野町が史跡宮滝遺跡公有化事業を開始し、公有化による史跡指定地の保護を図る
1988年	収蔵庫で展示されていた弥生土器や縄文土器の再調査が行われる
1996年	吉野歴史資料館が建てられ、宮滝出土品収蔵庫内で保管されていたものがすべて移管、一部は常設展示される
2012年	宮滝遺跡第1次調査出土縄文土器・石器が県指定文化財となる 森林セラピーロード「吉野・宮滝万葉コース」が認定を受ける
2014年	『吉野万葉整備活用計画基本構想』が策定され、宮滝遺跡の整備に向けて動き出す

“中荘”へのアクセスガイド

自動車
- 西名阪自動車道(郡山I.C)から約1時間30分
- 名阪国道(針I.C)から約50分

鉄　道
- 近鉄阿部野橋駅－大和上市駅　特急で約1時間10分
- 近鉄京都駅－大和上市駅　特急で約1時間30分

※大和上市駅からは町営のスマイルバスをご利用いただき、宮滝バス停で下車してください(約20分)。

協働によるマップづくり

奈良県では、地域資源を再発見するため、様々な地域でマップづくりを行っています。平成29年度は右の地区で作成しました。

中　荘
(吉野町)

このマップは「中荘地区まちづくり協議会」と「なら・まちづくりコンシェルジュ(事務局:奈良県地域デザイン推進課)」が協働で作成しました。

平成31年(2019年)3月発行

問い合わせ先:
中荘地区まちづくり協議会(吉野町総合政策課内)
TEL 0746-32-3081
吉野町総合政策課　TEL 0746-32-3081
奈良県地域デザイン推進課　TEL 0742-27-5433

古代の行幸の地“中 荘”

中荘は、古代の天皇の行幸の地でした。**宮滝**の宮滝遺跡からは斉明天皇が造営した吉野宮の遺構である大型建物や苑池(えんち)の遺構が出土しています。吉野宮は、斉明天皇の時代に造営され、壬申の乱を経て持統天皇の時代に増築されたと考えられています。

吉野宮は古代最大の内乱と言われる壬申の乱で大海人皇子(後の天武天皇)が挙兵した場所としても有名です。大海人皇子たちが東国へ向かうために最初に向かったのが、**矢治**の矢治峠だと言われています。

壬申の乱に勝利した大海人皇子は即位して天武天皇、鸕野讃良(うのさらら)が皇后となります。天武天皇が、皇后と草壁皇子など6人の皇子を伴って吉野宮に行幸した際に詠まれたのが次の万葉歌です。

「よき人の　よしとよく見て　よしと言ひし
　　吉野よく見よ　よき人とよく見
　　(『万葉集』巻一－二七)」

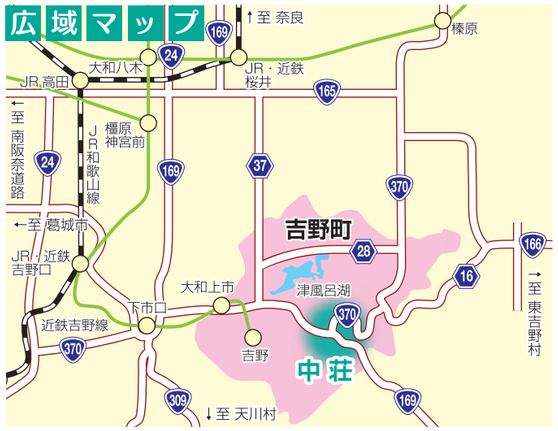
『万葉集』には、現在の中荘の地名が多く詠まれ、**宮滝**、**喜佐谷**の象山・三船山、**菜摘**の菜摘の川などがあります。

天武天皇が亡くなると鸕野讃良は、持統天皇となり、在位中31回吉野宮に行幸します。この数多い行幸に扈従(こじゅう)した人々の生活を支えたのが **御園**と言われています。

奈良時代以降も宮滝への行幸は続きます。宮滝遺跡の西側からは、聖武天皇が造営した吉野離宮の遺構が出土し、現在遺跡の整備に向けて発掘調査が進められています。また、『続日本紀』には文武・元正両天皇の行幸も記録されています。

吉野宮模型

吉野離宮の瓦



“中 荘”を彩った女性たち

柘枝姫

『西国三十三所名所図会』

私の名前は柘枝(つみえだ)。吉野川に舞い降りた天女です。吉野川で柘の枝に身を変えて、水遊びをしていると、吉野の漁師美稲(うましね)さんの簗に引っ掛かってしまいました。美稲さんは、美しい柘の枝の私を家に持ち帰り、そこで姿を現した私と美稲さんは恋に落ちたのです。私たちの歌は、『万葉集』や『懐風藻』に載っています。

静御前

『大和名所図会』

私の名前は静。京では白拍子舞の名手として知られていました。源氏の御曹司源義経さまと恋仲になります。兄の頼朝さまと仲違いをした義経さまと一緒に吉野山へ逃れて、ここで義経さまとお別れしました。私は鎌倉幕府の侍に捕えられ、鎌倉へ送られ、鶴岡八幡宮で義経さまを慕う舞をまいました。

謡曲『二人静』は、私が主人公で**菜摘**と吉野山が舞台となっています。

持統天皇

私の名前は、鸕野讃良(うのの さらら)。父は天智天皇、母は遠智娘(おちのいらつめ)。大海人皇子と結婚して、草壁皇子を生みました。大海人皇子とは、壬申の乱前に吉野宮で8か月間を過ごします。この乱に勝利した大海人皇子が天武天皇として即位すると、私は皇后になりました。夫である天武天皇がお亡くなりになると、持統天皇となり、31回も吉野宮へ行幸しました。

※は、この地をこよなく愛した万葉の女性を顔に、中荘地区7カ大字(**楢井・御園・喜佐谷・宮滝・菜摘・樫尾・矢治**)を髪型にあしらえた中荘地区まちづくり協議会のロゴマークです。

“中 荘”と 万 葉 集

中　荘
(吉野町)

『万葉集』には、宮滝を中心にこの附近を歌ったものが百余首あります。これらの歌は、何回もここに繰り返し来て遊びたい心情を赤裸々に詠じ、滝に淀に、山に野に魚に、悠々とした上代人らしい想像を直線的な、力のこもった調子で叙情した歌です。

こうした情をおこさせたのは、この地が、風光明媚な山間の景勝地であり、奇岩石の上を吉野の清流が玉のようにくだけて流れた壮観さや、秀麗な山々が人々の心をひきつけた地であったからだと思われます。この地は、現在も当時のままです。